

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 31日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520659

研究課題名（和文） 日本古代施釉陶器生産における畿内と東海の比較研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of *Kinai* and *Tokai* in the Production of Japanese Ancient Glazed Pottery

研究代表者

高橋 照彦（TAKAHASHI TERUHIKO）

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10249906

研究成果の概要（和文）：平安時代の施釉陶器の大生産地は畿内（平安京近郊）と東海地域であるが、その相互比較が不十分であることから、本研究を企図した。平安京近郊窯のうち篠窯は、東海地域とは異なる生産技術を持つとみなされていたが、研究代表者が調査した篠の大谷3号窯では、種々の検討の結果、部分的ながらも東海地域から技術の導入を行っている点を指摘できた。さらに、製品の色彩や化学成分などに関するデータをふくめ、詳細に考古学資料を再点検することにより、地域を越えた技術工人の移動や影響関係などを復元することができた。

研究成果の概要（英文）：The two districts on the periphery of the Heian-kyo capital and the Tokai region were centers of glazed-ware production in Japan during the Heian Period. Because mutual comparison between the two districts was insufficient, this research project was planned. The Shino kiln site which is located in the district on the periphery of the Heian-kyo capital was considered to have different manufacturing techniques from the Tokai area. But as a result of examination, I concluded that some parts of the technology from the Tokai area was introduced to the Otani 3 kiln which our research group excavated in the Shino kiln site. Furthermore, while rechecking the archaeological data of the products in detail, and analyzing the data about colors, chemical components, etc, it is realized that artisans of glazed-ware production move across the area and affect the production of other area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：窯業、緑釉陶器、須恵器、測色、胎土分析、磁器、金属器、丹波篠窯

## 1. 研究開始当初の背景

（1）正倉院宝物の三彩陶器に代表される施釉陶器は、飛鳥・奈良時代に海外の高度な技術を導入して自国で製作が行われた手工業生産物のうち、考古学的に実態を追及する

数少ない存在である。本研究は、このような施釉陶器のうち、隆盛を遂げた平安時代における生産状況に焦点を当てたいと考えた。

（2）平安時代の施釉陶器の生産地域として、畿内（平安京近郊の山城・丹波）、東海（尾

張・美濃・三河)、防長(長門・周防)、近江が挙げられる。これら個別地域の古代施釉陶器生産に関しては、既に種々の検討がなされてきており、研究代表者も畿内や近江・防長地域に関しては専論をまとめ、近江・防長地域についてはかなり詳細に産地間の比較検討なども行っていた。しかしながら、研究代表者も畿内と東海については網羅的な相互比較を行なっておらず、課題として残されていた。また他の研究者においても、産地を越えた概説はあるものの、さらに踏み込んで畿内と東海の両地域を比較するという視点での検討は十分に試みられているわけではなかった。

(3) 近年では、畿内などの生産地においていくつかの新たな資料も増加しており、それを踏まえた再分析の必要も生じていた。とりわけ、平安京近郊窯のうち丹波の篠窯では、これまで東海地域とは異なる生産技術を持つとみなされていたが、研究代表者による発掘調査によって、9世紀末頃に操業された大谷3号窯では、東海と類似した技術や形態を持つ緑釉陶器が出土するという新たな事実が明るみにになった。丹波の篠窯と東海窯とに直接的な関係を有するのかなどを、新資料をふくめて、より詳細に検討することが求められていた。

## 2. 研究の目的

(1) 上記のような施釉陶器生産の研究現状に鑑みて、施釉陶器生産地のうち窯数や製品の流通量において抜きんでており、しかも検討が不十分な畿内と東海の両地域の比較に焦点を据えて、その実態を整理することを目的とした。

(2) そのために、具体的な検討対象として篠の大谷3号窯をはじめとする篠窯跡群について重点的に生産内容を検討することにより、平安京近郊の各窯や東海窯など生産地間の関係を抽出し、それを包括的に歴史に位置付けていくことを、第一の目的とした。

(3) さらに、篠窯に限らない地域を対象として多角的な比較・検討によって、畿内と東海の各生産地の地域的特質と相互関係を究明し、施釉陶器生産の実態と歴史的位置の解明を目指した。

## 3. 研究の方法

(1) 畿内と東海の実態を明らかにするため、比較的消費地の動向が押さえられているのに対して、新たな生産地での出土資料が増えていることを踏まえ、窯出土資料に立ち返って再検討を試みようとして企図した。

(2) そのための基礎作業として、未報告である個人保管の表面採集資料や既報告ながら十分に詳細なデータが明らかでない発掘資料などに関して、重点的に整理した。その

際には、研究代表者が試案を作っている器種分類や計測方法に基づいて調査を進め、器種構成や製作技術などに関して個別の遺物を詳細に観察することにした。

(3) 本研究の特筆すべき点の1つとしては、施釉陶器の色調の検討を挙げることができ、古代施釉陶器の着眼点としては、これまでも釉調などがあったが、感覚的な色彩表記が多かった。そのため、分光測色計による測定、ならびに目視による標準色票との比較同定の双方を新たに行い、それらに基づく研究方法の構築を試みた。

(4) 上記のように考古学的に資料を再点検し、釉調・胎土などの色彩に関するデータなどの蓄積を行うとともに、それらをふまえて新たに化学分析データも追加することによって、これまでの技術論では包括できなかった側面を検討に取り入れることにした。

## 4. 研究成果

(1) 生産窯関連資料の整理・検討としては、大谷3号窯出土品など、京都の篠窯跡群を重点的に進めた。

①篠窯の緑釉陶器生産の初期には、東海窯と類似した貼付高台の緑釉陶器稜椀が生産されたが、検討の結果、金属器そのものの模倣という側面も想定されたが、その一方で東海地域と比較すると、猿投窯黒笹地区製品との相違点や二川窯など東海諸窯との類似などが指摘されるに至った。

②緑釉陶器の椀を多角的に分析すると、輪状と蛇の目という高台形態の差違が、法量の大小や素地の色調の硬軟に対応していることを新たに確認できた。これは、金属器と青磁という模倣対象の差違に対応するものと推測され、『延喜式』にみえる「瓷器」(緑釉陶器)のように、器種の作り分けを踏襲するものと評価できた。

③この他、各種の個体数計測データによる統計上の問題点や、製作時の特徴的な手法によって陶工の個人識別が可能になりうることなど、方法論的にも興味深い事実も明らかになっている。

④以上のように、細部の分析や諸要素ごとの相関が十分に検討されてこなかった緑釉陶器の研究に新たな方向性が生まれたものと考えており、それらは他の分析にも活用できる視点と言える。

(2) 今回の研究における一つの柱である色調の測定・検討を行った。

①客観化のために色票による同定と分光測色計による測定を進め、後者がより暗く判定される点など、今後の色調判定における留意点が導かれた。

②測色をふまえて、1つの産地でのばらつきの特徴や、測色の計測値と釉調や胎土との相関関係なども指摘できることになった。

③篠の大谷3号窯において生産された、東海窯と類似した貼付高台の緑釉陶器碗が、胎土において篠窯周辺の粘土を用いているものの、その焼き上がった色調には差のあるものが認められ、釉の色調において他の篠窯製品とは差違があった。またそれらは釉調だけでなく、釉層の厚い点も加えて、東海製品と類似したものであることが明確となった。先に記したような形態や製作技術の類似だけでなく、施釉に関する点でも、大谷3号窯の製品が東海製品と共通することから、篠窯への東海からの技術の流入といったことが示唆された。

(3) 胎土や釉に関する化学分析などを行い、その結果についても再検討を行った。

①東海や畿内の洛北あるいは篠の初期の窯は、緑釉陶器と須恵器などで胎土の選別を行っていた可能性が高いが、洛西や篠の一般的な窯ではその選別がなされていないことが明確になった。洛西や篠などでは、大量生産による製品そのものの粗雑化が、選土段階での労力の軽減化を伴っていることなどを推測できた。

②釉についても新たに分析を行い、釉調と釉の化学組成との関係など、きめ細かく点検し、化学分析と考古学の結合により、従来は注目されていなかった知見を得た。

(4) 生産地間の関係や特質を整理した。

①篠窯の緑釉陶器は、平安京周辺の産地から技術を導入して生産が行われていることが明らかであるが、篠窯最古段階の緑釉陶器窯である大谷3号窯では、平安京周辺だけでなく、東海系の製作工人が参画した可能性が想定できた。同様に、平安京周辺の中核的産地である京都市洛北においても、中の谷3号窯のように、明らかに東海からの技術を導入している例を再確認した。

②滋賀県の緑釉陶器窯は、基本的な緑釉陶器製作技術として東海系技術を受け継いでいるが、近江最古段階の緑釉陶器窯であることが判明した甲賀市の春日北遺跡の6号窯は、篠窯でみられる三角形を呈する窯とみられ、篠窯との技術的な交渉が窺われた。しかし、この場合は製品の製作技術としては篠との直接的な関係は認めがたい。

③上記のように、狭域内での技術伝播だけでなく、旧国など地域を越えた技術の交流が輻輳したことが明確になった。そのような工人の動きの背景には、ある地域内の生産者自身の要求に基づくというよりも、それを管掌する立場の存在が無視できない。生産地が離れているにもかかわらず、緑釉陶器の製品としての共通性などを生む背景も、そのような地域間の動きによるものと推測された。

④ただし、篠窯では基本的には平安京近郊窯の削り出し高台による製作技術を採用しており、その技法を後まで受け継ぐのに対して、

東海系技術を取り入れた可能性がある大谷3号窯の貼り付け高台の手法は、継承されない。この点は近江の事例などでも同様であり、篠の技術は定着しない。そこには、新技術の導入時において特殊な遠距離地域との技術の交渉が存在する一方で、技術の親縁性などから製品の形態などは取り入れられるとしても、技術はそのままの形では継承されないという、技術受容のパターンを見出すことができた。

(5) より広く歴史的な位置を考えるために、施釉陶器生産に限らない各種手工業生産について包括的な整理・検討を行った。

①施釉陶器以外の専門研究者を交えて合同の研究会を開催するなどして、基礎情報を確認した。

②施釉陶器に限らず、須恵器さらには瓦や金属器などの生産に関して、文献史学と考古学の双方からの研究事例の再検討を行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①中久保辰夫「篠窯跡群大谷3号窯出土供膳器の性格と史的意義」『太邇波考古』第31号、両丹考古学研究会、1～13頁、2010年、査読なし

②高橋照彦・長尾正義「三沢市平畑(1)遺跡から出土した緑釉陶器について」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第15号、35～47頁、2010年3月、査読なし

③高橋照彦「律令期葬制の成立過程」『日本史研究』559号、1～23頁、2009年3月、査読なし

〔学会発表〕(計8件)

①中久保辰夫「緑釉陶器の製品管理―篠窯跡群大谷3号窯出土資料を対象として―」、大阪歴史学会考古部会6月例会、阿倍野市民学習センター、大阪、2010年6月11日

②森 暢朗・田中由理・中久保辰夫・高橋 照彦「京都府篠大谷3号窯の調査と整理事業の成果」考古学研究会関西例会(164回)、2010年5月29日、大阪市港区民センター

③中久保辰夫・高橋照彦「緑釉陶器の系譜と規格性―京都府亀岡市篠窯跡群大谷3号窯の出土資料を中心に―」日本考古学協会大会、2010年5月23日、国士舘大学

④高橋照彦「考古資料からみた律令社会の成立過程とその変容」日本史研究会大会、2008年10月11日、花園大学

⑤高橋照彦「銭貨と土器からみた仁明朝」『仁明朝史研究会』第5回研究会、2008年9月15日、同志社女子大学

[図書] (計7件)

①高橋照彦・中久保辰夫・白石純・齋藤努・田中由理ほか(共著)『篠窯跡群大谷3号窯の研究』、大阪大学文学研究科考古学研究室、2012年、総520頁

(上記所収論文に、酒井将史「土器の計測方法と定量化に関する基礎的検討」、高上拓「篠窯における開始期の緑釉陶器生産とその展開―稜碗の分析を軸に―」、石井智大「緑釉陶器の生産地間交流をめぐる一考察―大谷3号窯の貼り付け高台をもつ緑釉陶器の成立背景―」、田中由理「緑釉陶器の色彩学的考察―大谷3号窯出土品の目視同定と器械計測―」ほか)

②高橋照彦ほか(共著)『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺―』財団法人古代学協会編、思文閣出版、2011年、141～188頁

③高橋照彦ほか(共著)『天平びとの華と祈り―謎の神雄寺―』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編、柳原出版、2010年、220～244頁

④高橋照彦ほか(共著)『Jr. 日本の歴史』①、小学館、2010年、137～292頁

⑤高橋照彦ほか(共著)『宴の中世一場・かわらけ・権力―』高志書院、2008年、35～68頁

[その他]

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 照彦 (TAKAHASHI TERUHIKO)  
大阪大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：10249906

### (3) 連携研究者

白石 純 (SHIRAIISHI JUN)  
岡山理科大学・総合情報学部・准教授  
研究者番号：70434983

田中 由理 (TANAKA YURI)  
元興寺文化財研究所・研究員  
研究者番号：70611614

中久保 辰夫 (NAKAKUBO TATSUO)  
大阪大学・大学院文学研究科・助教  
研究者番号：30609483

齋藤 努 (SAITO TSUTOMU)  
国立歴史民俗博物館・研究部・教授  
研究者番号：50205663

### (4) 研究協力者

増田 富士雄 (同志社大学)  
広岡 公夫 (大阪大谷大学)

伊東 隆夫 (京都大学名誉教授)  
降幡 順子 (奈良文化財研究所)  
石井 智大 (三重県教育委員会)  
高松 雅文 (三重県教育委員会)  
吉田 知史 (交野市教育委員会)  
酒井 将史 (名古屋市教育委員会)  
木村 理恵 (奈良文化財研究所)  
高上 拓 (高松市教育委員会)  
田村 美沙 (大阪大学大学院修了生)  
前田 俊雄 (奈良県立橿原考古学研究所)  
三好 元樹 (志摩市教育委員会)  
野島 智実 (大田市教育委員会)  
金澤 雄大 (御所市教育委員会)  
森 暢郎 (桜井市教育委員会)  
市 大樹 (大阪大学)  
中川 あや (奈良文化財研究所)  
奥村 茂樹 (大阪府文化財センター)  
柳沢 菜々 (大阪大学大学院生)  
(主要協力者のみ、順不同)